〈声〉の採集者列伝 聞き手たちの時代

鈴木棠三

翻字と翻訳

鈴木棠三の昔話調査と国語教育

伊 藤 龍 平

はじめに 国語政策と昔話

う理解している 日本の昔話は、 近世に醸成し、近代に発見された ―― 私はそ

新しい話題である。 どうであったのか。この時期にフィールドを歩いた先達の抱えて は語り手の言葉とどう向き合ったのか。そもそも調査者の言葉は の言葉は、聞き手の言葉は、どうであったのか。そして、 全国の方言が「国語」として統一されていったこの時代、語り手 葉の問題である。近代とは、日本語史上、最大の変革期であった。 いた問題の多くは、 そこで忘れてならないのは、昔話が発見された近代における言 今日のわれわれにとっても刺激的な、古くて 調査者

たわけだが、時の流れが立場を逆転させた。

考えてみたい。 校を足場に昔話採集をした鈴木棠三を例に、如上の問題について 近代の国語政策の最前線は、学校であった。小文では、その学

異人の言葉

ジャーな言葉」たる標準語(野村の表現を借りれば、「学校言葉」 えられてきた昔話は、近代以降の国語政策によって広まった「メ 同じであった。むろん、当初は方言のほうがメジャーな言葉であっ つ、「マイナーな言葉」すなわち各地の方言によって培われ、 「教室言葉」)に駆逐されたと述べている。事態は帝都においても 東京下町生まれの野村純一は、自身の幼少時の体験に依拠しつ

翌十二年には『川越地方昔話集』を刊行しているほか、「邑智郡 柑子集』(昭和五十五年、私家版)によると、昭和十一年に「中 うけて、昔話を採集して歩いたのは、まだ、方言が「メジャー 蒲原郡昔話」「佐渡昔話」「北村山昔話」を『昔話研究』に報告、 な言葉」であった昭和十年代のことである。棠三の自筆年譜 鈴木棠三(本名、脩一、一九一一~九二)が、 柳田國男の命を

ている。昔話集』を世に問う一方、「対馬昔話」を『旅と伝説』に執筆し昔話集』を世に問う一方、「対馬昔話」を『旅と伝説』に執筆し書話」「飛騨昔話」を『昔話研究』に載せ、同十四年には『佐渡

異なった言葉を操る異人であった。 の標準語であったとみるのが穏当であろう。調査地における棠三 静岡弁のみで会話をしていたとも思われない。やはり、静岡訛り 父は東京に住んでいたものの、棠三自身は、國學院大學に入学す 刀剣総拵師を家職とした鈴木家は、代々静岡に住んだとある。祖 水市)。家史『金具屋年代記』(鈴木棠三、昭和五十三年)には、 ろう。年譜によると、棠三の出身は静岡県庵原郡飯田村 地域社会における学校の役割について押さえておく必要がある。(4) である。背景に、各地の学校教員の協力があったこと、および、 てて話者を発掘し、 るまで郷里を離れなかったようである。さりとて、旅先の棠三が、 した。棠三の比喩を借りるならば、学生を「ガイガー管」に見立 これらの調査において、棠三は好んで地域の学校を足掛かりに 他のフィールドワーカーと同様、 調査地における棠三の言葉は、どのようなものであった その後で棠三が本調査に乗り出すという方式 その土地において、ひとり 清

には、明確な力関係があった。
近世の旅人たちもそれぞれの土地言葉を携えてやってきたが、近世の旅人たちもそれぞれの土地言葉を携えてやってきたが、

『しゃみしゃっきり』(昭和五十年、未来社)の「おいがき」に

いう。以下、棠三の筆によるその場面の再現。
語で話してくれさえすれば、教育効果絶大であると主張」したと語で話してくれさえすれば、教育効果絶大であると主張」したとは、異人の言葉を話す棠三の来訪を歓迎する小学校長の言葉が紹

「私の言葉が標準語だなんて、とんでもない」と私は大いに「私の言葉が標準語だなんて、とんでもない」とおっしゃる。私のだということを、児童に実感させたい」とおっしゃる。私のだということを、児童に実感させたい」とおっしゃる。私のだということを、児童に実感させたい」とおっしゃる。私の責任は、とみに重いものとなった。

右のような文章を読むと、あらためて、われわれが国語の統一右のような文章を読むと、あらためて、われわれが国語がにない。 いまや異人の言葉は、方言のほうで語の関係は完全に逆転した。いまや異人の言葉は、方言のほうで語の関係は完全に逆転した。いまや異人の言葉は、方言のほうで語が、抽象化された「方言」として認知されていたという意味でいるのような文章を読むと、あらためて、われわれが国語の統一者のような文章を読むと、あらためて、われわれが国語の統一

ものであった。先の校長の発言にもあるように、標準語を「一種で使用される特殊な言葉であり、日常の生活言葉とは掛け離れた今日でもその傾向はあるが、近代における標準語とは教室空間

ことである。

者として話し、生徒たちにも話させた。

る教室においてであったことである。異人の言葉を、彼らは教育のは、学校の教員たちである。ただし、調査者と違うのは、教員のは、学校の教員たちである。ただし、調査者と違うのは、教員

の一節を引用する。
、の一節を引用する。
、の一節を引用する。

はサソを継がない。子供同志での時はサソを継ぐ。く云ふさうである。小學校の話し方の時間では、先生の話にく云ふさうである。小學校の話し方の時間では、先生の話にの話では、女生徒だと「サース」「セース」と尻上りにやさし

ソ」は継がれていた。

いうまでもなく、「サース」「セース」は昔話の相槌として知らいうまでもなく、「サース」「セース」は目話の相槌をうつ」の意味がれた例が挙げられている。そして「話し方」の時間にも「サソ」を継がれた例が挙げられている。そして「話し方」の時間にも「サソ」を継がれた例が挙げられている。そして「話し方」の時間にも「サソ」は継がれていた。

興味深いのは、「サソ」が継がれたのは、生徒同士での話の場

ほしい。だから「サソ」を継げたのである。 合に限定され、先生の話では継がなかったという点である。おそ 合に限定され、先生の話では継がなかったのではない、先生の話でとは思えず(よし、「話し方」の時間に 生徒らが標準語を話せたとは思えず(よし、「話し方」の時間に 生徒らが標準語を話せたとは思えず(よし、「話し方」の時間に 生徒らが標準語を話せたとは思えず(よし、「話し方」の時間に と従らが標準語を話せたとは思えず(よし、「話し方」の時間に が選れなかった、そう判断して過つまい。一方、この時点での が測れなかった、そう判断して過つまい。一方、この時点である。おそ を経らが標準語を話せたとは思えず(よし、「話し方」の時間に が選びましていたとお

た現在、教室言葉に「サソ」を継ぐ子供はいるであろうか。これも遠いような話である。方言が「マイナーな言葉」になっ

二、川越の翻訳家たち

方の調査を例に考えてみたい。然るべきであろう。それはどのようなものであったのか。川越地昔話採集は「綴り方」の時間に行なわれた。この点は強調されて昔話採集は「綴り方」の時間の風景であったが、棠三の先に紹介したのは「話し方」の時間の風景であったが、棠三の

述する手法(当時は「乙式調査」と称された)を採っているために、
 間一越地方昔話集』(昭和五十年、岩崎美術社)の関係を確認する。
 蔵川越世話集』(昭和五十年、岩崎美術社)の関係を確認する。
 蔵川越地方昔話集』(昭和十二年、民間伝承の会)と『武まず、『川越地方昔話集』(昭和十二年、民間伝承の会)と『武まず、『川越地方昔話集』(昭和十二年、民間伝承の会)と『武

話の多くは解題的な筆遣いで採録されている。

第三の昔話編集の様子がわかるのである。 「武蔵川越昔話集」を『川越地方昔話集』の前に置くことにより、 『武蔵川越昔話集』を『川越地方昔話集』の前に置くことにより、 『武蔵川越昔話集』を『川越地方世話集』の前に置くことにより、 『武蔵川越音話集』を『川越地方世話集』の前に置くことにより、 『武蔵川越音話

高る生徒は標準語と方言の折衷体で書いている。あろう昔話を、ある生徒は標準語で書き、ある生徒は方言で書き、ある生徒は標準語で書き、ある生徒は方言で聞いたで、「武蔵川越昔話集」を読んでいると、口承資料の文字化に頭を

みは、自身の文化を異化することでもあったろう。体を考案せねばならない。母語である方言の語りを文章化する試方には教科書はあるが、方言にはあるはずもなく、自分たちで文女らが書いたのは、あくまでも擬似方言であった。標準語の綴りとはいえ、書き言葉としての方言が創出されなかった以上、彼とはいえ、

それらを文体の面から大別すると、次の四種に分類される。

①全体に方言をちりばめた口語体

③一話の最初と最後の文のみ口語体で、あとは標準語②随所に方言を使用しているが、全体は標準語

(4)全編、標準語

最初の話の報告者は、細野愛子嬢(二年)。話者は細野嬢の母挙げる。

である。

りに山一つ向うの村へお芝居をしに行きました。といい、人でした。そしてまた九平さんは大変な孝行者でした。九平人でした。そしてまた九平さんは大変な孝行者でした。九平という人が住んでいました。九平さ昔むかしある所に九平という人が住んでいました。九平さ

以下、話の末尾までこの調子で続く。細野嬢の文章は綺麗な標準語で書かれている。文体は明晰で、少しも淀むところがない。同時代の童話作家たちの作品と較べても、遜色のない仕上がりと同時代の童話作家たちの作品と較べても、遜色のない仕上がりとが味はない。結句も「めでたし、めでたし」と童話風である。彼妙味はない。結句も「めでたし、めでたし」と童話風である。彼り味はない。温野嬢の文章は綺麗な標かなかに見事であった。

断つことは不可能だったのである。 を登した生徒もいるが、それでも標準語との関わりをる過程で、方言を標準語に翻訳した。後で述べるように、全編をを過程で、方言を標準語に翻訳した。後で述べるように、全編をおり がっことは不可能だったのである。

いない。
二話目の報告者は、石倉さと子嬢(一年)。話者名は記されて

ある所に田の倉久助さんという大変孝行の人がありました。そこの家は小さなお百姓で(小さいということはみんなの家は小さなお百姓で(小さいということはみんなの家は小さなお百姓で(小さいということはみんなの家のように大尽でない、小作というて人様の畑を借りて作って、そして働いて食べて行くのです)、そしておとっさんは早く死んでおっかさんと久助さんの二人きりでした。この久助さん、ある所に田の倉久助さんという大変孝行の人がありました。

川越昔話集』の実質的な編纂者である野村純一も「語り口は抜群」であるとしたら、彼女の文体創出は成功したといえよう。『武蔵が意図的なものか無意識にそうなったものかはわからぬが、前者が意図的なものか無意識にそうなったものかはわからぬが、前者が高図的なものか無意識にそうなったものかはわからぬが、前者が高くに会話の部分に方言の語り口が生かされている。これたが、とくに会話の本籍を表している。紙幅の都合で引用はできなかっり込んだ折衷体で書かれている。紙幅の都合で引用はできなかってある。

衛門という当時八十七歳の老翁で、栃木県の人という。最後の話の報告者は、佐藤まち嬢(学年不明)。話者は高橋右

「土地の言葉がよく判る」と評している。

手の同意をえるため念をおすことば)。ふう(そう)だけんどの家は貧乏な、おまんま(ご飯)も食えねようなんだかんな(相ある百姓家で貧乏な家があったんだと。そーしたらな、そこ

おれが話も聞くっこよ

木を売りに行ぐんだちけど。 は毎日毎日山へ木取りに行っては、お羽黒山を越えて隣村へは毎日毎日山へ木取りに行っては、お羽黒山を越えて隣村へがよ、そこの家は、おっかやんと安兵衛ち息でよ。安兵衛

対する意識を明敏化させたのかもしれない。

がする意識を明敏化させたのかもしれない。

がする意識を明敏化させたのかもしれない。

がする意識を明敏化させたのかもしれない。

がする意識を明敏化させたのかもしれない。

一読してわかるように、全編にわたって方言が用いられ、標準一読してわかるように、全編にわたって方言が用いられ、標準

他方、佐藤嬢の文章からは、方言を記述することの不可能性を 指摘できよう。彼女がカッコで注をつけたのは、読み手である棠 指摘できよう。彼女がカッコで注をつけたのは、読み手である棠 指摘できょう。彼女がカッコで注をつけたのは、読み手である棠

三、昔話の書き手

てもセンテンスの紹介にとどまっている。方言でまとまった文章味深い資料を遺してくれているが、その多くは単語レベル、長く方言に関心をもつ学者や好事家は近世期からおり、いろいろ興たが、思えば、これも近代になって生まれた概念である。

ことのに、「小でいるでしてされ、これがしってでは、見というのは、一種、曲芸的な営みであった。を書くこと自体が空前の試みであるのに、なおかつ、それを読む

一般的にいって、方言を忠実に文字化したとされる文章は、他一般的にいって、方言を忠実に文字化したとされる文章は、他域の人間はもとより、地元の人間にとっても読みにくい。方言を味のとれない記号に化していくのを、不思議に眺めていたのである。川越の翻訳家たちも、自身の言葉が、書かれることによっても読みにくい。方言を味のとれない記号に化していくのを、不思議に眺めていたのである。川越の人間にとっても読みにいか。

は『川越地方昔話集』所収「たのきゆう」の全文である。において同話型は、どのように編集されたのか。次に引用するのにおいて同話型は、どのように編集されたのか。次に引用するの、光に紹介した、細野・石倉・佐藤嬢の報告は、教員を通して

宝村淹留記」の一節である。

五三 たのきゆう

同じだから挙げない。
て、「た、たのきゆう」と云ふことになつてゐる。筋はどれもて、「た、たのきゆう」と云ふことになつてゐる。筋はどれる。安兵衛も大蛸の前で助けてくれと云ふのを云ひそこなつる。安兵衛もど,云つてゐ

採用した棠三の関心は、昔話の表現よりも、内容のほうにあったはどれも同じだから挙げない」とは何ともつれない。乙式調査を大量の資料を処理せねばならないという事情があるにせよ、「筋

も今も変っていない」とある。 は賛成ではない。話し方の急所が大切であるとする考えは、当時しがき」にも「昔話の全体を方言で書くことには、私は全面的にのであろう。『くったんじじいの話』(昭和三十三年、未来社)の「は

このような棠三の昔話叙述観の形成には、

柳田國男の影響が

ろう。次に引用するのは『しゃみしゃっきり』の跋文に相当する「上綴り方の時間に採集した昔話に、棠三は何を期待していたのだの点については、別途、考察する必要がある。田は、その実、昔話をコトバとして扱ったことは稀であった。こ田は、その実、昔話をコトバ、伝説をコトと定義していた柳あったと思われる。昔話をコトバ、伝説をコトと定義していた柳

(……前略)一般の子供達は、聞き手であって話し手ではなく、 まして書き手ではなかったのである。話は知っていても、それまして書き手ではなかったのである。話は知っていても、それまして書き手ではなかったのである。話は知っていても、それまして書き手ではなく、

れるのが、翻訳作業である。だが、それを生徒に要求するのは無次は机上で原稿に清書する際に ――書かれた。その間に行なわこの時代、昔話は二度 ―― 最初はフィールドで調査ノートに、当時の調査者の基本的な身ぶりであった。

「書き手」とは言い得て妙であるが、昔話を「書く」というのは、

り方すら習得中なのである。 き手」は小学生、川越女学校の生徒たちとは異なり、標準語の綴理な話である。しかも、右に引用した『しゃみしゃっきり』の「書

のこと」である。のこと」である。

東記術を知らぬということも、採集者としてのわれわれの 速記術を知らぬということも、保集者としてのわれわれの まが書くので話しにくいと何度も言っていたが、次の日から まが書くので話しにくいと何度も言っていたが、次の日から は書かせることに馴れた様子であった。そうしてあべこべに、 私が筆記を怠っている場合があると、 乗れておいてくれと注

場面に幾度もあった。
場面に幾度もあった。
場面に幾度もあった。
は、第三の指摘は今日でも通ずる。私の乏しいフィールドワークは、第三の指摘は今日でも通ずる。私の乏しいフィールドワークは、第三の指摘は今日でも通ずる。私の乏しいフィールドワークをいるところでは、第三の指摘は今日でも通ずる。の方としいフィールドワーカーの身ぶりが、話者の語り場面に幾度もあった。

おりにふれて速記に関する発言をしているが、次に引用するの速記に関する指摘は明らかに岩倉市郎を意識している。棠三は

は、『佐渡島昔話集』の「序」である。

いかと思ふ。
いかと思ふ。
いかと思ふ。

速記者の解釈が入る。 今回の特集では、岩倉市郎も立項されているようであるから、 今回の特集では、岩倉市郎も立項されているようであるから、

おわりに ―― 資料集の時代の終焉 ―

た。鈴木棠三もその一人であるし、川越女学校の生徒たちも同様た。鈴木棠三もその一人であるし、川越女学校の生徒たちも同様

それでは、録音器材が発達した今日、この問題は解決できたのかというと、とてもそうは思えない。むしろ、溝はいっそう深く広くなったようである。一例を挙げると、吉沢和夫は「テープに広くなったようである。一例を挙げると、吉沢和夫は「テープにはない」とこぼしたことを記している。

このが乗曲になったよともあるが、それ以上に、大量の音盲情報に対していた。 とおりに書くこともまた、不自然な営みなのである。ましてや、 たっては、言葉とすら呼べない。所詮、紙上に記録された「昔話」 たっては、言葉とすら呼べない。所詮、紙上に記録された「昔話」 はみな二次資料である。 しかしながら、技術の進歩はこうした難点も克服しつつある。 もかしながら、技術の進歩はこうした難点も克服しつつある。 とおりに書くこともまた、不自然な営みなのである。ましてや、 とおりに書くこともまた、不自然な営みなのである。ましてや、 とおりに書くこともまた、不自然な営みなのである。ましてや、

旧要となる。 上かしながら、技術の進歩はこうした難点も克服しつつある。 として、利用者の手元に届けることができる。権利問題さえク料として、利用者の手元に届けることができる。権利問題さえク料として、利用者の手元に届けることができる。権利問題さえクリアできれば、ホームページ上に話者の声をアップした口承資料として、利用者の手元に届けることができる。 生をつくることは容易である。今後は、この方面への取り組みが 集をつくることは容易である。今後は、この方面への取り組みが ながら、技術の進歩はこうした難点も克服しつつある。

註

- 平成十七年 岩田書院 (1)野村純一「昔話・語り手・言葉」『伝承文学研究の方法』
- (2) 鈴木棠三の自筆年譜『薮柑子集』は『國學院大學近世文学
- (3) 『くったんじじいの話』 「はしがき」にある表現。
- 所収)にある。 (4) 地域の学校教員が担った役割の具体例が、棠三の川越調査

行なっている。 調査以前に、同女学校の生徒八百人を対象に伝説の採集を中に柳田國男と知遇を得て、民間伝承の会に所属。棠三の中に柳田國男と知遇を得て、民間伝承の会に所属。棠三の川越高等女学校の教員であった山田は、國學院大學在籍

- - 大學在籍、「「学生」

唱者である金水敏の『ヴァチャール日本語 役割語の謎』いる「役割語」の問題とも関わる。役割語については、提

(7)このあたりの経緯は『武蔵川越昔話集』「序」に詳しい。

(平成十五年、岩波書店)参照

(8) 『武蔵川越昔話集』では、次のように説明されている。

乙式は、全体としては録音的に記録する必要を認めな

をする場合が往々にある。
がのる行き方で、実際には話者のほうでこのような話し方める行き方で、実際には話者のほうでこのような話し広いが、部分的に貴重な資料となりうる話の場合、主要ないが、部分的に貴重な資料となりうる話の場合、主要な

- それらは『柳田國男未採択昔話聚稿』(前記)に収録され(9)他に、柳田國男によって公表を見送られた資料群があり、
- こでは、調査者を意識した語り口になっている。
 ダーの普及した時期に行なわれた追跡調査報告である。こ究と資料――』第二号(昭和四十八年)は、テープレコーのと資料――』第二号(昭和四十八年)は、テープレコー
- (11) 詳しくは、飯倉義之「採訪の技術史――國學院大學学生(11) 詳しくは、飯倉義之「採訪の五〇年――」(『学生研究会による
- (12) 速記者の翻字と解釈の問題については、谷川恵一が明治期

ご教示によって知った。 ゆくえ』 平成五年 平凡社)。なお、同論考は榊祐一氏の

た無国番方膏が用いられている。 れているが、その他の人物の台詞には東西の方言を混淆し3)「夕鶴」では、主人公「つう」の台詞には標準語が用いら

た無国籍方言が用いられている。

『戯曲の日本語』(昭和五十七年(中央公論社)で述懐して(これが意図的に行なわれていたことは、木下順二自身が

吉沢和夫『民話の心と現代』平成七年 白いる。

白水社

14

てまとめられている。ご興味のある方は、そちらも参照大學近世文学会会報』第十三号に「鈴木棠三特集」とし※なお、鈴木棠三の人と学問については、近刊の『國學院

(いとう・りょうへい/台湾・南台科技大学)

されたい。